

裁判所



名古屋城三の丸遺跡

現地説明会資料

平成 19 年 3 月 3 日 (土)

主催 (財) 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

支援 株式会社 朝日航洋

順路 →



堀

どるい方面



護国神社



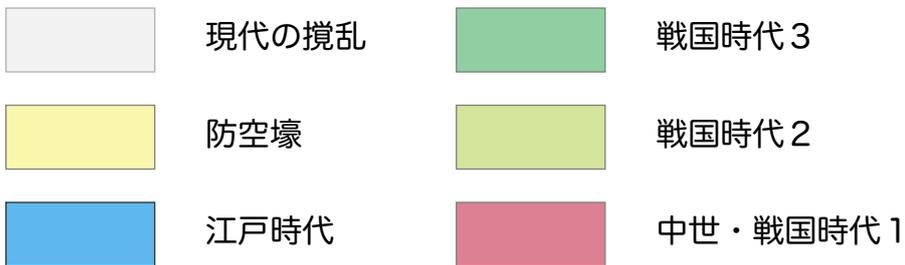
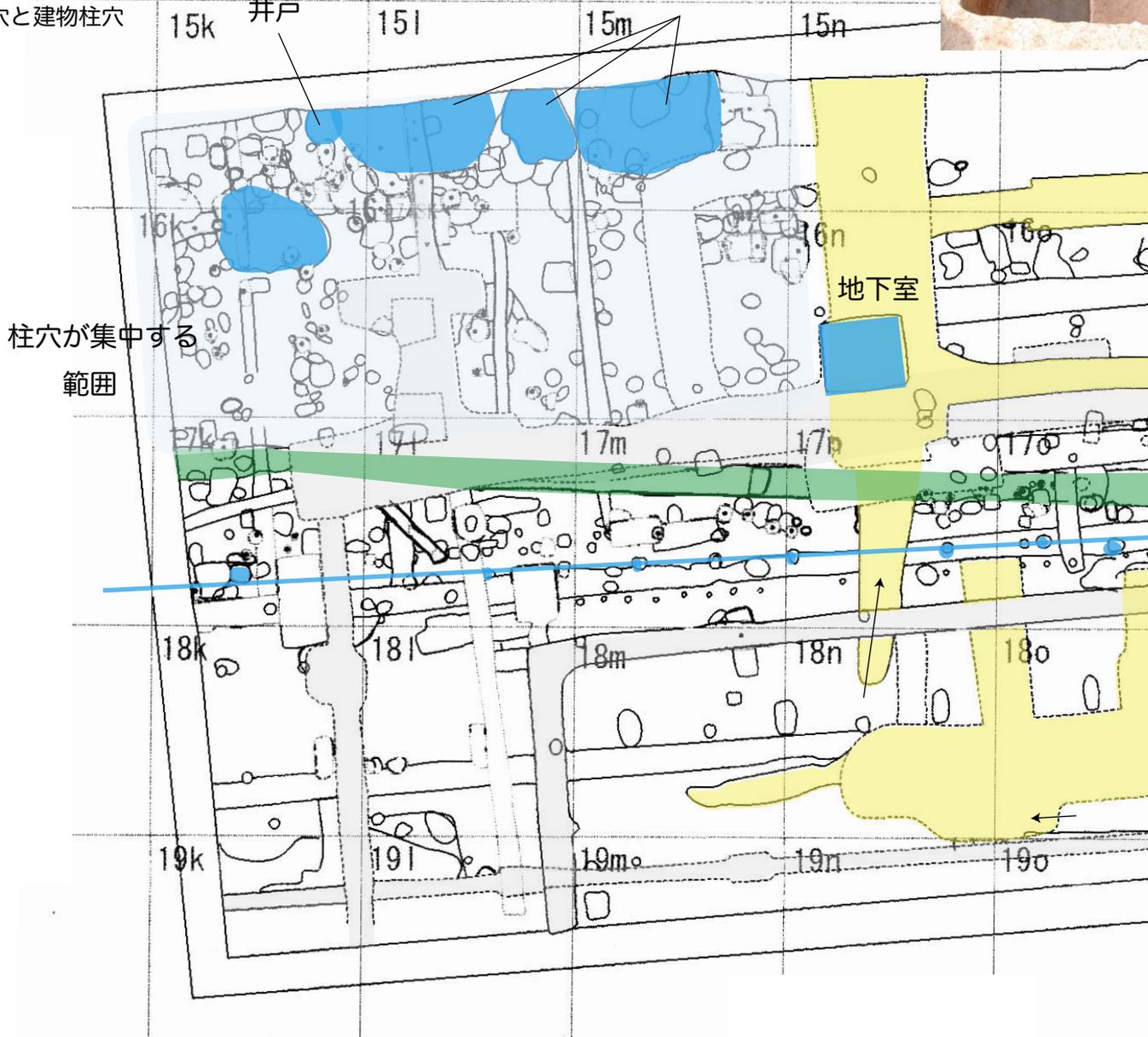


地下室をゴミ穴に転



ゴミ穴
(廃棄土坑)

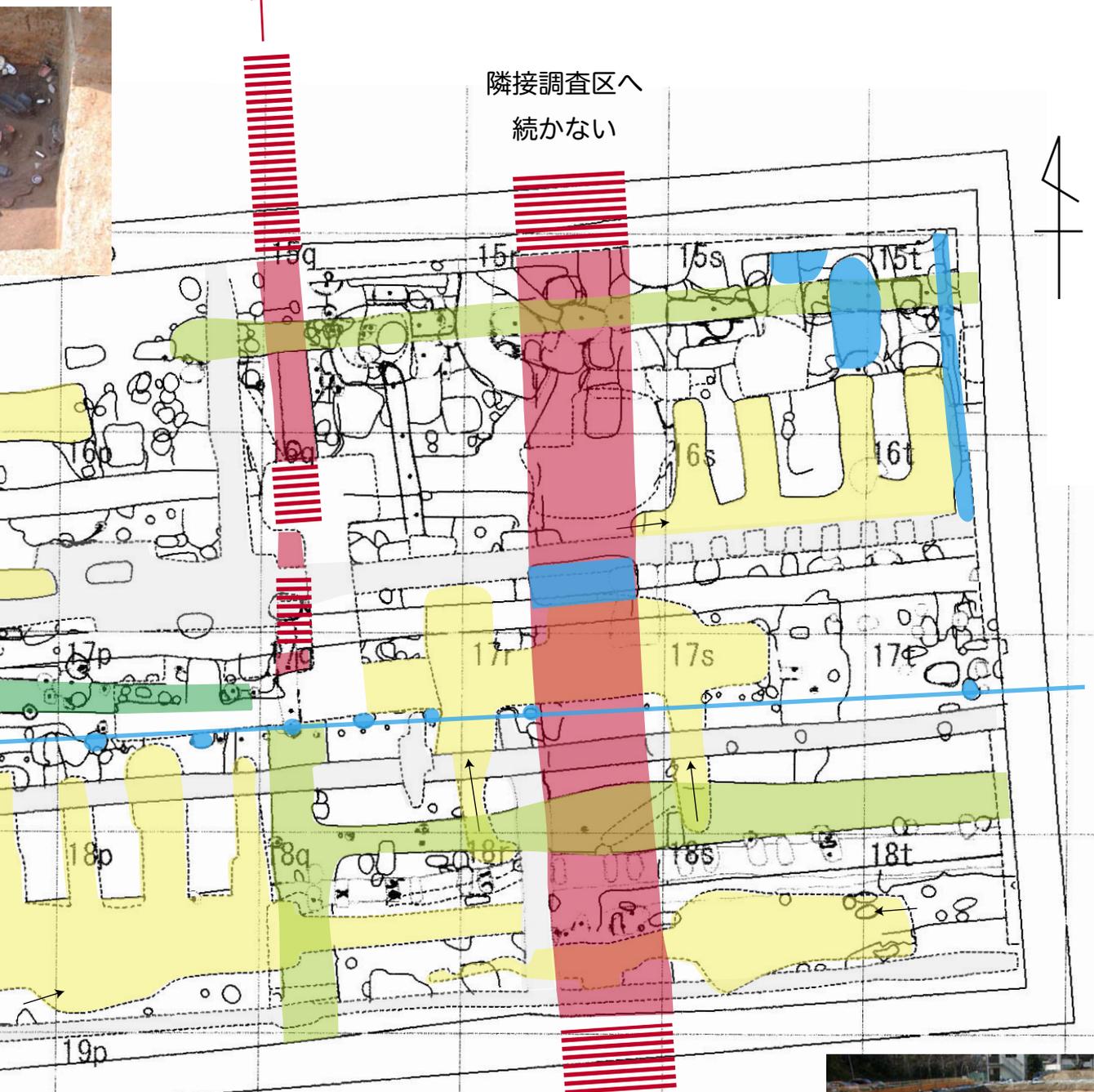
北西部のゴミ穴と建物柱穴



用

隣接調査区へ続く

隣接調査区へ
続かない



戦国時代の堀
 (断面はV字状で東側の肩に
 犬走状の平坦な部分が設け
 られている)



戦国時代の区画溝
 (掘削前の状況, 東から)

名古屋城三の丸遺跡関連年表

年代	三之丸記事
1524 大永 4	この頃、今川氏親「那古野城」を築き、氏豊を城主とする
1532 天文 元	この頃、織田信秀、今川氏より那古野城を奪い居城とする
1534 3	信秀、那古野城に入る。織田信長、同城に生まれる（勝幡城説あり）
1555 弘治 元	信長、清須城に移り、織田信光（後に林通勝）を那古野城主とする
1582 天正 10	この頃、那古野城廃城となる
1609 慶長 14	徳川家康、名古屋築城を決定
1610 15	築城開始。「清須越」始まる
1613 18	三之丸土塁・堀普請完成
1615 元和 元	本丸御殿完成
1616 2	徳川義直、駿府より名古屋へ移り本丸へ居住
1620 6	義直、二之丸へ移る
1663 寛文 3	二之丸の成瀬・竹腰の両屋敷を三之丸へ移す、三之丸内の屋敷替多数
1745 延享 2	松平君山『士林沂』完成
1858 安政 5	奥村得義『金城温故録』完成
1871 明治 4	二之丸に東京鎮台第三分営設置
1873 6	名古屋鎮台設置
1886 19	名古屋鎮台を第3師団に改称改編
1925 大正 14	宇垣軍縮により、工兵第3大隊浜松へ
1945 昭和 20	名古屋大空襲

今回みつかった遺構

堀（断面V字状、薬研堀）

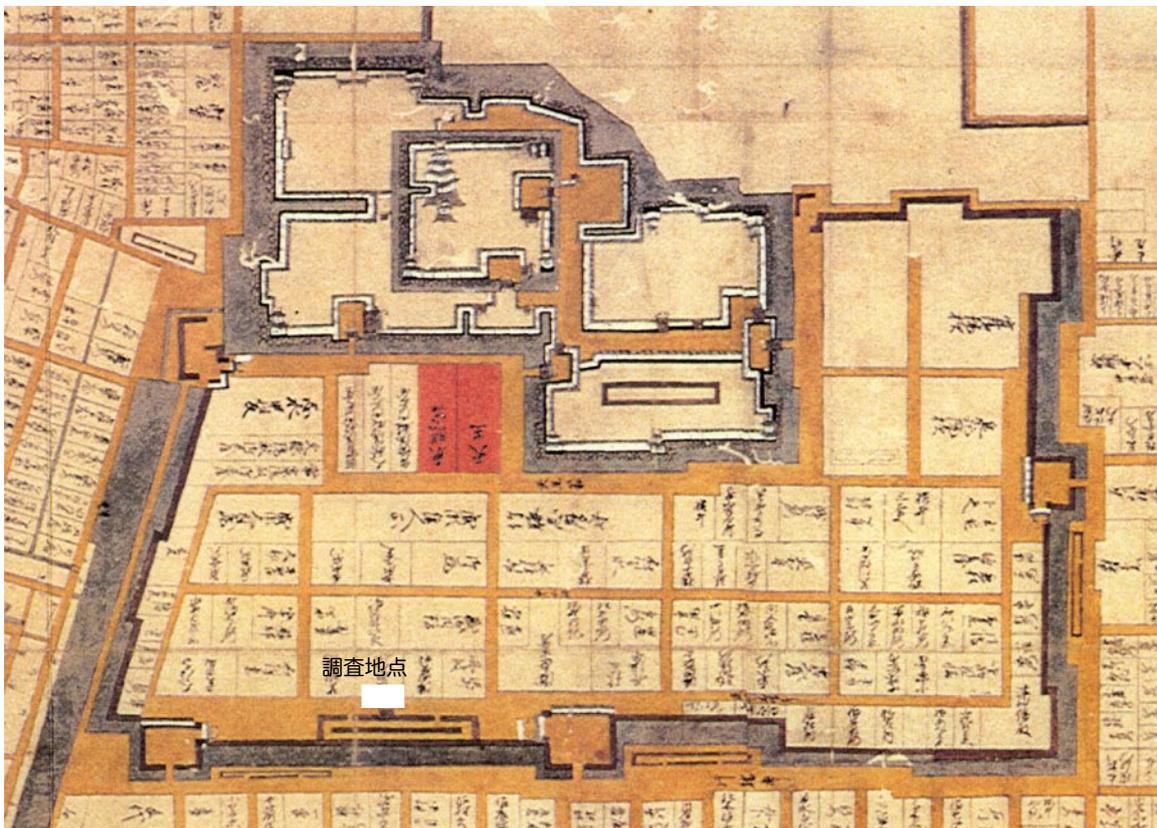
屋敷地区画溝（断面U字状）

築地堀？・柵列？
井戸

ゴミ穴（廃棄土坑）

煉瓦建物跡

防空壕



名古屋図（享保末年作成，名古屋市蓬左文庫蔵，白抜き部分が調査区推定範囲）

<名古屋城三の丸遺跡について>

官公庁街のある名古屋市中区三の丸に所在します。近世名古屋城の上級武家屋敷があった「三之丸」郭内すべてが遺跡の範囲とされており、これまでに20ヶ所余りの地点で調査が行われています。名古屋城の築かれた場所は熟田台地の北西端にあたり、遺跡の西縁部では弥生時代～古墳時代の居住域・墓域が確認され、また広い範囲で中世・戦国時代の堀や溝が見つかるなど、江戸時代以前の人々の営みも明らかになってきました。

<調査の経緯>

名古屋高等・地方・簡易裁判所合同庁舎増築のための事前調査として、愛知県より委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが、(株)朝日航洋の支援を受けて発掘調査を行っています。調査期間は平成18年11月～平成19年3月、調査面積は1,089㎡です。

<調査地点の概略>年表・武家屋敷図参照

戦国時代に今川氏親によって築かれ、織田信長も一時城主となった那古野城の中心は、現在の三の丸北部周辺と推定されており、城下の範囲は三の丸地区に広く及ぶと考えられるようになってきました。今回調査地点のすぐ北側調査地でも屋敷を囲む大規模な溝が確認されています。

江戸時代の三之丸には上級武士(格は番頭以上、石高は1000石以上)の屋敷がおかれ、居住者は代わりましたが、藩から拝領する屋敷地の境界や建物は勝手に変更できなかったと考えられています。調査地点は、土塁北側に沿って東西にのびる「御馬場」「南御土居筋」に面する屋敷地の境界付近にあたります。

明治維新、廃藩置県のち、明治6年に名古屋鎮台がおかれ、明治19年に陸軍第三師団と改組されましたが、それから終戦まで名古屋城全域が軍の管理下に置かれました。調査区周辺は輜重兵第三連隊、工兵第三大隊、第三師団司令部既に関連する兵舎や倉庫等が配置された場所と考えられます。

<主な調査成果>主要遺構図参照

現在の地表面は標高約13m。地表から1.2～1.4mの深さまでは近代から現代の盛土があり、その下で近世、中世・戦国時代、古墳時代の遺構と遺物が検出されました。

◆近・現代◆

台地の硬い地盤を掘削して造られた防空壕5基があります。基本的な構造は、幅の狭いスロープをもつ出入口、やや幅のある通路、通路に直交して取りつく長方形の複数の部屋からなり、壁は床から真直ぐ立ち上がっています。天井は掘り抜かれており、建物地下に造られたかあるいは何らかの蓋で覆われていたと想定されます。最も規模の大きいものは、通路幅が2.2m、これに幅約80cm、長さ6～8mの部屋が2ヶ所以上あり、検出された部分で深さが2.2mあります。そのほか、拡張して横から掘り始めたものの中断して完成していない箇所や、壁には当時の掘削道具(スコップ?)の跡もみられました。軍に関連する遺物として、軍用食器、国民食器など陶磁器類、インク瓶や薬品容器などのガラス製品、アルマイト製食器、ボタン、キセル、蹄鉄、拍車などの金属製品、歯ブラシのほかレンガや建物に用いられていた石材が大量に出土しました。

◆江戸時代◆

ゴミ処分のための廃棄土坑、井戸、建物柱穴、溝、柵列があります。ゴミ穴は調査区の北西と北東部に集中して掘られています。北西部の土坑群の南側には柱穴が並び、建物があったと想定されます。やや離れた場所に縦横1.9×1.7m、(検出面からの)深さ2.2mの方形土坑があり、おそらく貯蔵のための「地下室」であったものを最終的にゴミ穴に使ったと考えられます。調査区中央付近には東西方向に土坑が並び、柵のような境界が想定され、これより南側にゴミ穴はありません。土坑には瀬戸・美濃地域で焼かれた陶磁器をはじめ、肥前産、京都や信楽産の陶磁器、土師質の鍋や皿、焼塩壺、土人形や瓦のほかハマグリなどの貝殻や骨など食物かすが含まれるものもあります。遺物は、江戸時代中期と後期から幕末にかけての時期のやきものが多くを占めますが、肥前染付皿や鉢、急須や涼炉などの茶器や煎茶道具、玩具である「箱庭道具」など、上級武士の暮らしを窺わせるものもあります。

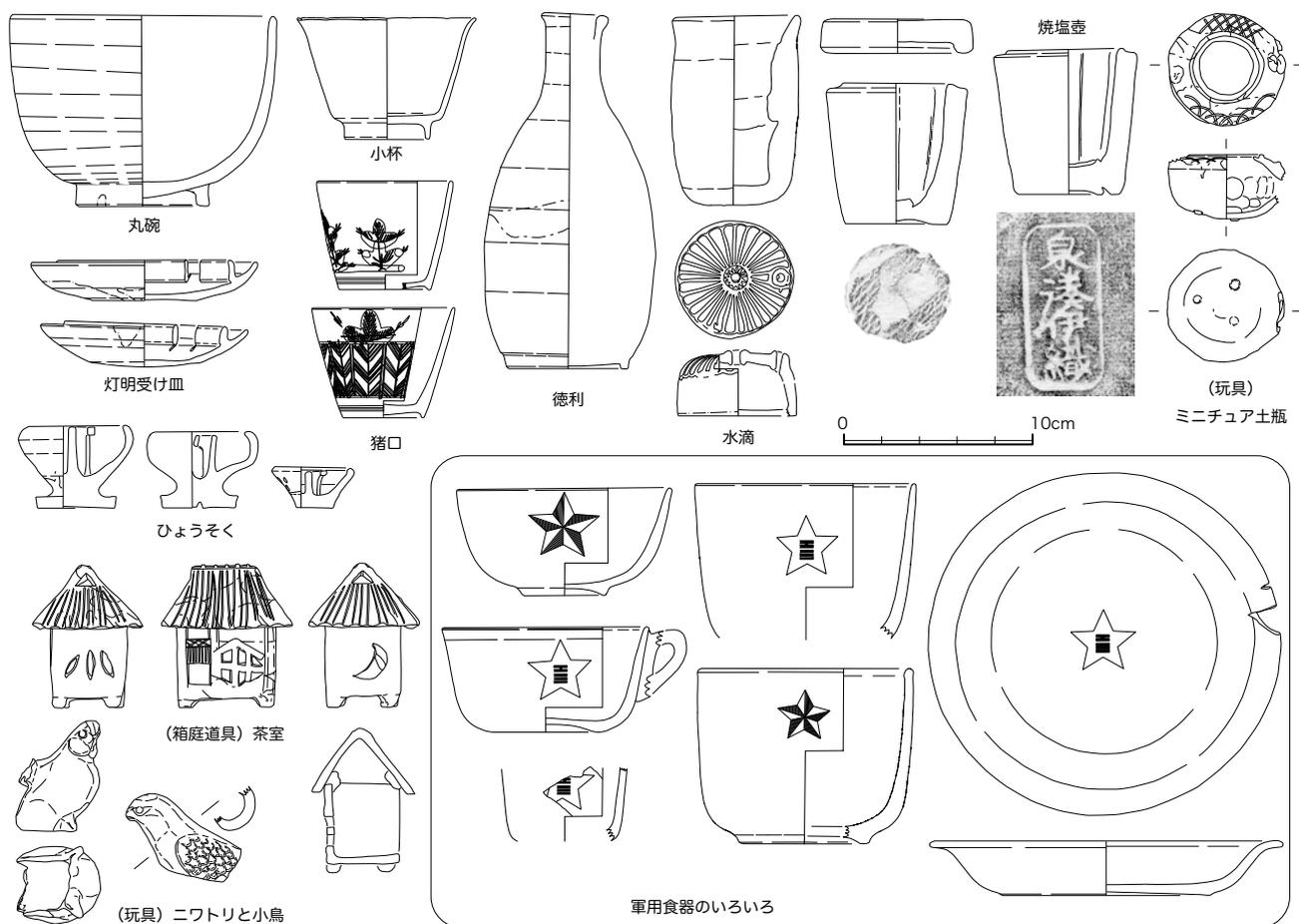
◆戦国時代◆

屋敷地を囲んでいた堀と溝があります。調査区を南北方向に貫いている深い堀(堀1)は、幅が3.07m、深さ2.4m、断面がV字状の「薬研堀」と呼ばれる形態です。埋められた状況から、東側に土塁があったと想定されます。堀は短期間で埋められた後、整地され、新たに別の区画が設定されました。この後掘られた溝(溝2,3)の断面はU字状や逆台形となり、幅0.8～1.2m、深さ30～70cmと規模は縮小しています。

「堀」から「溝」のつくり替えは非常に大規模な工事を伴うものであり、広範囲に行われたと思われます。出土遺物からは16世紀前半頃に区画が大きく変更されたと考えられ、那古野城の城主が今川氏から織田氏へ代わる時期と重なることが分かってきました。

<まとめ>

- ・戦国時代的那古野城周辺の動きとして、区画が大きく変更されていたことが分かりました。城主の変更との関連が注目されます。
- ・江戸時代の武家屋敷の「屋敷表」の境界付近には遺構は少なく、ゴミ穴は江戸後期以降に多くがつくられています。調査区中央付近を東西に、道と屋敷地の境が通ると推定されます。ただし、境の構造(築地塀や門など)については不明です。
- ・軍施設の防空壕跡、出土遺物は戦時の日常生活の一端を伝える資料として今後評価されるものと思われます。



出土した陶磁器・土製品 (縮尺 1/4)